

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第 卷九十第

行發日一月一十年三十正大

## 論叢

娛樂税の構成……………法學博士 神戸 正雄

フィアカントの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

獨占の本質……………文學博士 高田 保馬

天保時代の西陣……………經濟學博士 本庄榮治郎

## 時論

小麥及小麥粉關稅引上是非……………法學博士 河田 嗣郎

營業稅廢止論を評す……………法學博士 小川郷太郎

## 說苑

リカアドの價值論に就て……………經濟學士 森 耕二郎

## 雜錄

政府の輸出貿易振興策に就て……………經濟學士 谷口 吉彦

獨逸最近の乳兒死亡率……………經濟學士 岡崎 文規

## 獨逸最近の乳兒死亡率

岡崎文規

最近、獨逸帝國統計局の出版にかゝる *Wirtschaft und Statistik* (Juli 1924) が到着した。其の中の "Die Säuglingssterblichkeit im Deutschen Reich im den Jahren 1913 und 1919 bis 1923" を私は興味深く讀んだから其の概要を左に紹介する。

千九百二十三年に於ける、獨逸帝國の一歳未満の所謂乳兒死亡數は一七〇、四四一であつて、生産百に付き一三・二に當つてゐる。千九百二十二年の一三・〇に較べて一三・二は僅か許りの昇騰であるが、しかし乍ら、千九百二十一年の一三・四よりは減少してゐるし、尙ほ又千九百十三年の一五・一に比較する時は激減の勢を示してゐるものと言はなければならぬ。千九百

十三年及び千九百十九年乃至千九百二十三年の出産百に對する乳兒死亡數を示せば左の如し。

第一表 乳兒死亡數

年次	出產百ニ對スル死亡數		指數
	獨逸帝國	大都市	
一九一三	一五・一〇	一三・八六	一〇〇・〇
一九一九	一四・五〇	一二・〇三	九六・〇
一九二〇	一三・一一	一三・一五	八六・八
一九二一	一三・三八	一二・一八	八八・六
一九二二	一三・〇〇	一二・八三	八六・一
一九二三	一三・二〇	一三・〇一	八七・四

戰後に於て乳兒の死亡率が減少しつゝあるのは、獨逸帝國に於ける一般の保健状態が良好であるためではなくして、寧ろ乳兒保護の問題が八釜しく唱導せられた結果にもよるであらうが、中に就いても、出產數の激減の結果によるものであると言ひ得られる。大都市に於ける千九百二十一年乃至千九百二十三年の乳兒死亡率は、獨逸帝國全體に於て見られるが如き、大なる減少率は現はれてゐない。戰前には常に全國

の平均以下にあつた大都市の乳兒死亡率は、(出產率も同様に低いのであつたが) 多少づゝ減少する傾向を取りつゝあつたのである。それ故に出産百に對する大都市に於ける乳兒死亡數は常に全國平均の乳兒死亡數よりも、凡そ一・四位は低かつたのである。戰後に於ける全國の乳兒死亡數が、戰前の一〇〇に對して、九三に減少して來たのを見て、非常に好ましい現象であるが如く考へる人もあるだらうが、それは健康状態が改善せられたのに原因してゐるのではなく、主として出產率減少に伴ふ乳兒死亡率の減少に依るものである事を注目しなければならぬ。出產率が減少すれば、それに伴つて乳兒死亡率は減少するものである。そして又、乳兒死亡率が減少すれば、一般死亡率も減少するものである。斯くの如き特殊なる關係によつて惹き起された乳兒死亡率の減少が、總死亡率に及ばず影響は總死亡率に、乳兒死亡數を除外した特殊死亡率を對照せしむるならば明らかに之を看取する事が出来る。千九百十三年の總死亡率一

〇〇に對して千九百二十三年の總死亡數は九二・七であるが、一歳以上の死亡數に就いて見る時は、千九百十三年の〇〇に對して、千九百二十三年は一〇・三を示し、戰前より約一・三の増加を示してゐる。これで見るとは、國民全體の保健狀況は決して良好なものではなく、従つて戰前に比して戰後の死亡率は増加してゐるものと見なければならぬ。偶々戰後に於ける乳兒死亡率が戰前より減少しつゝあるのは、全く出生率の減少に基因してゐるものである。次の第二表は千九百十三年及び千九百十九年乃至千九百二十三年に於ける人口千に對する總死亡數並に一歳以上の者の死亡數を示したものである。

第二表 人口千に對する死亡數

總死亡率	指 數	一歳以上の死亡率	指 數
一九一三	一五・〇	一一・九七	一〇〇・〇
一九一九	一五・六	一三・一五	一〇九九
一九二〇	一五・一	一二・八三	一〇七・二
一九二一	一三・九	一一・六四	九七・二
一九二二	一四・四	一二・四四	一〇三・九
一九二三	一三・九	一二・二二	一〇一・三

雜 錄 獨逸最近の乳兒死亡率

次に乳兒死亡率を生存の月數に別ちて觀察する。千九百十三年の各月數に於ける乳兒死亡數を百とすれば、千九百十九年乃至千九百二十二年に於ける各月數に於ける乳兒死亡數は第三表の如き結果を示す。

第三表 生存の月數による性別乳兒死亡數

〇—一	一九・五	一九・三	一九・三	一九・三	一九・三
一—二	六・六	六・二	六・四	六・九	六・八
二—三	八・九	八・四	七・九	八・五	八・二
三—四	八・三	八・七	八・〇	八・九	八・八
四—五	六・三	七・九	七・五	七・一	七・八
五—六	七・七	八・四	八・二	八・五	八・三
六—七	六・〇	八・四	八・五	九・〇	九・三
七—八	六・八	七・五	七・一	七・六	七・九
八—九	七・四	七・〇	七・五	七・七	七・〇
九—一〇	八・七	八・二	七・四	七・八	七・〇
一〇—一一	九・八	七・七	七・四	七・六	七・八
一一—一二	八・四	七・七	七・〇	七・五	七・七
一三—一四	八・六	八・五	八・一	八・六	八・七
一五—一六	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
一七—一八	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
一九—二〇	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
二一—二二	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
二三—二四	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
二五—二六	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
二七—二八	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
二九—三〇	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
三一—三二	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
三三—三四	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
三五—三六	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
三七—三八	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
三九—四〇	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
四一—四二	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
四三—四四	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
四五—四六	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
四七—四八	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
四九—五〇	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
五一—五二	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
五三—五四	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
五五—五六	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
五七—五八	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
五九—六〇	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
六一—六二	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
六三—六四	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
六五—六六	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
六七—六八	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
六九—七〇	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
七一—七二	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
七三—七四	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
七五—七六	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
七七—七八	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
七九—八〇	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
八一—八二	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
八三—八四	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
八五—八六	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
八七—八八	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
八九—九〇	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
九一—九二	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
九三—九四	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
九五—九六	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
九七—九八	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八
九九—一〇〇	八・八	八・八	八・五	八・八	八・八

備考 上段は男兒、下段は女兒

右の表に就て見る時は、出生數は激減してゐる

第十九卷 (第五號 一五七)

七九一

るに拘らず、千九百二十二年を除く外は、男女共に、生存一ヶ月以内の乳兒死亡率は戦前の千九百十三年の乳兒死亡率より高いのである。尙

は千九百十九年に於ける乳兒死亡率は男兒の八ヶ月乃至十二ヶ月、及び女兒の十ヶ月乃至十二ヶ月は千九百十三年のそれ等よりも高いのであるが、其の他にあつては何れの生存月數に於ても最近の乳兒死亡率は男女共に戦前の乳兒死亡率に比較して低位に在るのである。女兒に較べて男兒の出生數は優勢である事と一年未滿の男兒の死亡數が多數であるとの關係から、一ヶ月間を通じての男兒の死亡率は、女兒の死亡率よりは高いのである。千九百十三年と比較すれば一ヶ月間を通じての最近に於ける乳兒死亡率の減少は男兒に於てよりも女兒に於て、別して六ヶ月以後に一層甚しいのである。斯くの如き六ヶ月以後に於ける、戦争に基く乳兒死亡率の昇騰は千九百十九年に至るまで顯著であつて（この點に關しては同誌千九百二十一年の第二號、九十八頁に於て論證されてゐる）それは又女兒

に於てよりも、男兒に於て特に甚しいのである。